

心の栄養剤No168 「人生の最終章」

「人生の最終章①」

あるご夫婦のお話です。旦那さんは黄疸が出たり内臓もすっかり弱ったりで、それほど長くはないように思われました。御家族はこの旦那さんが亡くなっていくことをすでに受け入れているようでした。

ある時僕は、この御夫婦から「3泊4日の広島旅行に行きたい」と相談されました。僕、こういうときは応援します。どんな状態でも「行ってらっしゃい」と言うんです。「何かあったら電話してください」と電話番号を渡して。

今まで何人かそんな方がいましたが、一回も電話がかかってきたことはありません。不思議なくらい必ず帰ってこられます。ですから僕はいつもそれを患者さんに話して、「大丈夫。今までの皆さんはちゃんと帰ってきてるから」と言って、背中を押すように送り出すんですね。ただ、「今回だけはどうも無理そうだなあ」と思っていました。

3日過ぎても電話はありませんでした。「入院してるか、あるいは亡くなってしまったのかもしれないな」と心配が募りました。

そんな日の夜に、奥さんから電話がかかってきました。「帰ってきました」と。「じゃあ今からすぐ往診に行きます」と僕は言いました。

「いや、いいです。元気ですから」と言われたのですが、それでも伺いました。帰ってきて連絡をしてもらえたことが嬉しかったし、生きている姿をしっかりと目に焼き付けておきたかったからです。翌日、旦那さんは意識を失い、その夜に亡くなりました。

こういう話すると皆さんは、「前の日まで元気に旅行されていたんでしょ。そんなに元気で簡単に死んでしまうものなの？」と思いませんか？それで「このくらい元気なんだから、まだ治療を続ければ必ず元気になれるはずだ」と思うわけです。だから家族の方々は皆さん、もっと患者さんを頑張らせて治療しないと許せなくなるわけです。

そうやって、「絶対死んじゃ困る。少しでも長く生きてほしい」と家族が望むと、患者さんは亡くなる際につらい思いをされるのです。

でも、この奥さんは違いました。旦那さんが「つらいのも病院も嫌だよ」と言った時点で、治療ではなく、旦那さんの意思を尊重して、旅行することを応援したんですね。

この旦那さんのように、家族に自分のやりたいことを応援してもらった患者さんは、「幸せな人生だった」と言って、安心して亡くなっていけるのです。

「緩和ケア 萬田診療所院長 萬田緑平」



「人生の最終章②」

乳がんで手術と抗がん剤治療が必要と診断された女性がいました。バリバリ仕事ができる女性で、バイクが趣味でした。バイク仲間の中で彼女は「姉御(あねご)」と呼ばれていて、その仲間の中に恋人もいました。

彼女は考えました。「治療に専念すると、仕事も辞めてバイク仲間とも恋人とも離れることになる。そしたら生きていても何も残らない」

そこで彼女はこんな人生の決断をしました。「私は手術しない。そして今の生活を続ける。その結果短い人生で終わってもいい。とにかく今の生活を楽しまたい」

その後彼女のがんは、僕が今まで見たことがないくらいの速度で進行していきました。そんな中、彼女から手紙が届きます。今思えば、亡くなる一週間前でした。

そこには、「バイクにも乗りたいし、ステーキや焼き肉も食べたいです。かといって仕事を辞めてまでプライベートに専念するのは、自分の生き方として筋が通らないのです」と書いてありました。実はこの時、彼女はもうご飯を食べられない状態でした。それでも「ステーキや焼き肉を食べたい」と書いたのです。それこそが彼女の「かっこつけ」であり、かっこよさだと僕は思いました。手紙の数日後、彼女は外来にやって来ました。お腹と足はむくんでパンパンで、黄疸が出ていました。意識障害もありました。自分でしゃべる時はしっかりしているけれど、僕がしゃべる時は、ぼんやり聞いていました。

彼女は緩和ケア病棟への入院を希望しました。「彼女ほど強い人が入院を希望したってことは、きっともう余命数日なんだろうな」と思っていました。



現状を知らせて彼女が少しでも早く入院できるよう、主治医にビデオレターを送ることにしました。ビデオ撮影の時、僕は彼女に「すごくつらそうな様子で『入院させてください』って言ったほうがいいよ」と言いました。でも彼女は、彼女らしくかっこをつけて、元気良さそうにしゃべっていました。僕からすれば撮影は大失敗です。でもそれでよかったです。彼女のその姿は、本当にかっこよかったですから。彼女が入院すると、バイク仲間たちが病室に集まってきて、ワイワイ盛り上がっていました。緩和ケア病棟ですから、騒いで職員から注意されましたが、それでも彼らは帰りませんでした。そして彼女は、仲間全員が集まっている中、皆に見守られながら亡くなっていきました。皆が「さすがだな。かっこいいな」とロクに言いました。僕は、「これはきっと彼女のシナリオ通りだ」と思いました。それだけでなく彼女は「死後の指示書」を遺していました。「自分の死を誰にどのように伝えるのか」「財産をどう処分するのか」など、すべて詳しく記されていたのです。その内容をバイク仲間が分担して遂行しました。

さらに彼女は、自分の遺体を医学部の解剖実習のための献体に申し込んでいました。数年して彼女の骨が戻ってきました。その骨には亡くなった彼女からの手紙が添えられていました。本当に完璧な「終活」でした。 「緩和ケア萬田診療所院長 萬田緑平」

今月はお盆という事で、法事を行ったり～お墓参りに出かけ先祖や親しかった今は亡き故人に想いを馳せ手を合わせる事が多い時期です。

生きとし生きる物、の命の炎は、すべていつかは消え、最後を迎えることになりましたが・・・

旅立つ時に自分自身出来るだけ後悔が少ないように、残される家族や友人に出来るだけ辛い想いをさせないように、自分のあるべき「終活」についても考えるお盆にしようと思います。

